高レベル放射性廃棄物の地層処分をテーマに —— ワークショップ「共に語ろう 電気のごみ～もう、無関心ではいられない～」

ニュース / 2007年12月04日 08時56分22秒

原発の使用済み燃料の再処理に伴って出る高レベル放射性廃棄物の処分についてのワークショップ「共に語ろう 電気のごみ～もう、無関心ではいられない～」(資源エネルギー庁など主催)が2007年12月1日(土)、名古屋駅前のTRK名古屋会議室で開催された。

高レベル放射性廃棄物は、地中深くに埋める地層処分をする方針で、国はその候補地を決めようとしているが、地元住民の拒否反応が強く、作業は進んでいない。こうした問題について、これまでのような国からの一方的な政策説明ではなく、様々な立場の各地の市民が意見交換することを目指して、NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネットの呼びかけで、ワークショップが実現した。参加者は、一般市民、環境NPOのメンバー、自治体職員、電力関係者などで、原子力関係の研究者もオブザーバーとして参加した。

午前中は、ワークショップに備えた情報提供が行われた。
まず、ジャーナリストの桝井成夫さんが「エネルギーと地球温暖化対策の将来展望」と題して講演。温暖化対策は今後20～30年が非常に重要で、日本に求められる削減を達成するには今ある原発は使うしかないという考え方を説明した。

地層処分などの情報提供に対して活発に質問する参加者

この後、資源エネルギー庁の原子力地域広報対策室長、和田真佐人さんが、原子力発電と核燃料サイクル、高レベル放射性廃棄物の地層処分の具体的な方法などについて解説。財団法人原子力環境整備促進・資金管理センターの稲垣裕亮さんが、海外での地層処分の手続きの現状を説明した。
質疑では、原発や地層処分のリスク、なぜ自然エネルギーをもっと重視しないのか、などエネルギーや原発をめぐる多様な質問が出された。

午後からのワークショップでは、こうした疑問点を出発点に、5つのグループに分かれて「どのように、どのような電気を使いたい？」「使ったあとの電気のごみはどうしたらいいの？」という2つのテーマについて意見を出し合った。

ワークショップでは、様々な立場の人たちが意見交換した

議論は「そもそも原発は必要ないのではないか」という原発そのものの是非に関するものから、「学校教育で原子力などのエネルギー教育をもっとすべきだ」「地層処分のリスクや原発そのもののリスクは実際どの程度なのか分かりにくい」といったコミュニケーションに関する内容まで多岐にわたった。「こういう場を持とうとすること自体、エネ庁も変わった。これまでは安全と言いながら力で入ってきていた。いずれは"超反対派"とも同席できればいい」といった感想も出された。

ワークショップの発表を聞く参加者たち

ワークショップの詳しい内容は、資源エネルギー庁のホームページで紹介される。こうしたワークショップは、今回の名古屋を含めて今年度中に全国各地で計5回実施の予定。
（安在尚人）